

## 海外留学記

# ミラノからスイスへの旅

足立政男

- 一 ミラノ見学
  - (一) ミラノ市
  - (二) ドーモ大寺院
  - (三) 記念墓地
  - (四) 其の他
- 二 イタリア人の日本人観
- 三 イタリアで感じた日本の歩むべき道
- 四 スイスの旅
  - (一) チューリヒ
  - (二) スイス国立博物館
  - (三) ペスタロッチの像
  - (四) チューリヒ大学及び国立理工科大学訪問
  - (五) ジェネバ
  - (六) モンブラン通
  - (七) 芸術と歴史の博物館
  - (八) ジュネーブ大学
- 五 スイスの工業
- 六 スイスの日本人観

紀元後七九年八月二四日、火山の神は、ヴェスヴィオ火山  
Vesuvie を大爆発させ、ポンペイを地上から消しさり、ロー  
マ時代の休養地と人口二万の人々を地下に埋め、ポンペイを死

の町と化した。そのポンペイも、一七四八年畑の中から掘り  
だされて以来、六六ヘクタールに及ぶ大遺跡、廢墟の町ポン  
ペイが、再度地上に出現したのである。そのポンペイをのぞ

き見して再びローマに帰った。ポンペイの澄みきった青空、ジュピター神殿跡、円形闘技場、敷石で舗装され、車道と人道にわかれた街路、まちかどに設備された水道栓、石造りの水漕等が印象的に頭に焼き付いている。南イタリアの風光明媚なナポリ湾、紫色で黒ずんで見える地中海、Vedi Napoli e Poi Muori!（ナポリを見て死ね!）といわれる世界三大美港のナポリを後にした時は、さすがに名残惜しかった。ローマから、ミラノ Milano への旅がつづく。世界の道はローマに通じるといふ。永遠の世界の都ローマを後にして機上の人となる。Alitalia Italian Airlines. のジェット機である。アフリカからの熱風にキラキラと焼きつける太陽と紺碧の青空、そして陽気で明るい南部イタリアともお別れである。アペニン山脈を越え、ポー川流域に入る。次第に冷気を感じる。このポー川流域の平原こそ、豊かな北イタリアが誇示している地方である。ほとんど全イタリアの工業生産を代表するばかりか、また農業生産の面でも、いわゆるイタリアの水稲農業も、このポー川の三角地帯に盛んである。機上約一時間でミラノ Milano 空港に到着、Diana ホテルに泊る。

## 一 ミラノ見学

### (一) ミラノ市

ミラノはローマに次ぐイタリア第二の大都市（人口一三七万）で、ロンバルディア地方の肥沃な平原にあり、ポー河の支流ティチノ川とアダ川の間 Olona River に沿って発達した都市である。その昔、ケルト人によって建設され、ローマ時代、殊にコンスタンチヌス大帝（三二四～三七七年）、テオドシウス帝（三八九～三九五年）の頃に大いに発展し、以来幾變遷、イタリア統一まで、イタリアの歴史はここに繰り広げられ、政治の中心はローマに移ったとはいえ、イタリア第一の産業および財政の中心地となったのである。

毛織物・絹織物・綿織物の盛んな都市である。九月中旬で日本の気候や気温とよく似ていて初秋の感が深い。プラタナスの葉が落葉しつつあり、公園の広場のベンチには老人達が日光浴を楽しんだり、群がり集って来る鳩や雀に餌食を与えてさわやかな秋の一日を楽しんでいる。南イタリアのあまぶしい陽光の下では絶対見られぬ風情であり、北部イタリア人は、概して沈静であり、論理的であるといわれるのも、この秋風の冷涼がしからしめるものであろう。それにしても、イタリア人は実に陽気で若者たちはイタリア民謡を口ずさみ、

ジャズを好み、ダンスもうまい。しかし、カイローアネーローマーナポリ等南欧特有の暑さ、そして雲一つなかった紺碧の澄ぎった晴天の連続が、ミラノに来て、始めて曇天と冷涼の氣を覚える。ホテルのベッドのフトンもそう思えば厚く感じた。

## (二) ドーモ大寺院

市電でドーモ広場に行く。(Piazza del Duomo) ミラノで最も有名な記念物であるドーモ大寺院があり、パリーのシャンゼリゼに比べられるところである。

**Duomo** 寺院は世界最大のゴシック風の大寺院で、一三八六年より建築が始められ、イタリア・フランス・ドイツの建築家によりうけつがれ、約五世紀の歳月を費やし、十六世紀に至って完成した建物である。この寺院は白大理石で作られ、中央の一段と高い一〇九米の頂上に輝く聖母の像をいただいた尖塔を始めとして、大小無数の尖塔には三〇〇〇体をこえる使徒の彫刻がぎざみこまれ、実に壮麗と信仰の力の偉大さにはほとんど感じさせられる。

薄暗い堂内、ステンドグラス(Stained Glass)を透してかすかに入ってくる光が更に壮嚴さを加える。入口の青銅の大

ミラノからスイスへの旅(足立)

扉は実に立派な出来はえて、西欧人が実によくもまあ一氣長く、精魂をこめて作製したものであるかな、とその偉大な文化の遺産に思わず敬虔の念の湧くのを覚えると同時に、自分の職分に生涯をかけて悔いず、しかも、たゆまず、こつこつと生命を打ち込む西欧人に感激する。恐らく発明や発見も、この何世紀にも亘って建てつづけるこの根氣と根性が生み出すものではないだろうか。日本人の氣短さ、根氣のなさから、発明や発見もなかなか生れ得ないとつくづく思い知らされる。

ドーモの北側に、ヴィットリオ・エマヌエリ(Galleria Vittorio Emanuele)がある。一八六五〜一八七七年に建築家メンゴヌイの設計で建築され、十字架を形どっており、縦一九〇米、横一〇四米、高さ三二米の巨大なアーケードである。建物は壮大なアーケードのガラス張で明るさと、大規模と、建築技術の優秀さは、全く一驚に価する見事さである。

## (三) 記念墓地 Cimitero Monumentale

一八六六年、恰度今から満百年前に作られた大理石、青銅などの彫刻で飾られた墓石が並び、さながら大美術館のような世界一ぜいたくな墓地であり、同時に西欧人の墓地を公園

化し、祖先の功績を偲ぶ墓標、生前のその人物を慕う愛情が至る処ににじみ出ており、墓に花を供える人、墓標に嵌め込んだ生前の肖像写真等、日本人としてもその創り方は大いに参考にすべきものが多い。

#### 四 其 の 他

ミラノで見ると、イタリヤ歌劇のメッカ、スカラ座のオペラと、サンタ・マリア・デレ・グラツイエ寺院 S. Maria delle Grazie の左手にあるドミニカン修道院の壁にかかげられた有名なレオナルド・ダ・ヴィンチの傑作「最後の晩餐」や、ミラノ城 Castello Sforzesco、ブレラ宮 Palazzo di Brera 等々見るべき文化財は多い。

#### 二 イタリア人の日本人観

一部のイタリア人は親日的であり、日本の女性はつつましくやかであり、美しい日本、水泳日本といった調子で、片ことの日本語さえしゃべり、日本人に対し極めて親切であり、好感をもっているが、これは特殊な日本に関係のある商工業会社に勤務する人々であって、一般のイタリア人、殊にイタリアの高等学校の卒業者ですら、日本については、一九〇五年、日露戦争で露国に勝った近代国家が東洋にある。それが日本

という国だ位にしか習わないというのだから、一般民衆には日本の首都は北京で、大統領は毛沢東かといった類から、日本人は蛇を常食にしているかと質問する低い日本人観もあり、今、なお、富士山、芸者、人力車の知識しか持たないイタリア人が多いことも事実である。最近では、インテリイの間で本田オートバイとか、鈴木自動車、キャノン等、日本の優秀な技術製作品品に対しての知識をもち、アジアにおけるドイツ人だといった認識をもちつつあることは実に日本人として喜ばしいことである。

ただし、イタリアの国家的指導者層、或いは産業資本家層と呼ばれる上層部に属するイタリア人の日本観、日本人観は、全然、一般民衆のそれとは異っている。いわゆる戦前から存在した黄禍論的観方と思想でもって、今なお日本に対していることである。日本人とは得体の知れない恐ろしい人間だと恐れていることである。①日本は東洋の遠い国である。②言葉も全く違っている。③国民性も違うし、国の歴史も違っている。④信仰面でも全く違っている。⑤働いて働いて勤勉さにおいてはこの上もないが、西欧人とは生活様式を異にし、そこには我々の如き文化生活は勿論、休暇(2)もない、無茶苦茶

な人間であり、人種である。「全くオカシナ人種」<sup>(3)</sup>「得体の知れない人種である」としか観ていないのである。

### 三 イタリアで感じた日本の歩むべき道

まず第一に、イタリア人は理性より感情にすぐれ、鋭い感覚を備えている。このような感覚が芸術や文化の上に独創を生み、イタリアを芸術の国、文化の国としたのである。我々はそのような意味で、西欧からすぐれた技術の導入を図ることはなんとしても大切であるから、絶対目を離してはならないし、又、離すべきではない。

第二に日本人は余りにもセツカチすぎる。住宅を建てるにしても、半年もかかるともう長すぎるといった感情で、いても立ってもいたたまれない気短い感情に襲われる。そのような国民性からは、大発明家も大芸術家も生れっこはない。Duomo を建てるにも五世紀の長い才月をかけて完成するといった気長さと芸術愛、信仰の深さ等は、日本人として大いに学ぶべきところであろう。イタリア人の悠長さは、テレビ番組でも日本のようにマスコミ的で激しさはないし、日本人のように積極的に相手を押しつけてでもやって行くといった積極性はない。面白いことは、休暇で遊びに行くにも毎年同

じ場所へ行って結構楽しんで来るといった実に気の長い民族である。

第三は、日本は御存知のように世界有数の教育普及国であり、義務教育就学率は九九・九%で最高であり、高校進学者は青年の七割に達し、また六八六校の大学・短大には約、百人を越える学生が在学し、青年五人に一人の割りで進学している。いずれにせよ、欧州のどこの国よりまさっている。ところが、イタリアでは、大学卒業者は百人中三〜四人で非常に少く、かつ、入学がむづかしい<sup>(4)</sup>。しかも彼等は大学を卒業すると選ばれた人としての地位につき、大いに大学卒業者としての力量を発揮する。日本のように誰もが大学への入学を狙い、大学を出たら同僚を押しつけて上位に立とうとするし、大学卒業者も高等学校卒業者も一諸に同じような仕事をしているし、またさせているが、イタリアの大学卒業者は、将来の指導者となることが約束され、又、指導者となり得る者として活躍し、待遇されている。例えば、給料も大学卒業者（一〜二万円相当の初任月給）、高等学校卒業者（約四万円位）、中学校卒業者（二万五千円位）と、大きな差位があり、それだけに大学卒業者は名実共に実力をもってその地位に

いている。高校以下の者は、あきらめと共にその地位に満足し、指導者の指揮に服従している。西欧の民主主義にはこのような一種の指導者原理といった一本筋金の入った民主主義思想があり、それだけに英雄出現、英雄の専制的指導者が、出現する可能性をもった民主主義であり、敗戦日本が被占領国としてアメリカ合衆国の民主主義をそのまま直輸入したのとは大いに相違している点は、日本人として、国政経営の上で大いに注意と留意をしておかねばならぬ点である。

第四は、日本人は国民として、教養を深くし、練成されねばならない。海に囲まれ、他民族と直接に国境を接せず、征服・被征服の経験に乏しい日本人は余りにも単純な国民でありすぎる。そのため特に外交面では下手である。幾百年幾千年の間に、幾度か、他民族、他国民に占領されたり、統治され、練り上げられて来た彼等、西欧人の国民性は日本人と比較にならない程複雑性をもち、憤慨した顔色を見せたり、日本人のように、黒か、それとも白かといった二者択一的に単純に割り切ったりは決してしない。日本人は余りにも子供ばい所がある。もともとと国民として大人にならなければならぬ。

第五は「オカシナ人種」「得体の知れない日本人」としての観察の中には、日本人を文化の低い教養の低い国民だと見る彼等の優越感も奥底にひそんでいると思われるのである。日本で、都会の大学に田舎の秀才が入学し、ガリ勉強をする——そして群を抜く——都会の学生に彼は秀才だと認めて貰う——のと同じような調子で西欧人は日本人を見ている。

このような観点から、これからの日本人は単にガリ勉強で西欧人に認めて貰うといったものでなく、国民的に、豊かな教養、高い文化をもった国民であるといった——立派な国民だ——という認識の下に西欧人に認めさせ、又、認識してもらう必要がある。しかしそれには長い才月を要する。恐らく今後、日本が OECD 加盟国の一員として活躍するとしても、西欧諸国民との間にはかくされた差別感或いは差別意識で遇せられるであろう。根強い黄禍論も、引続いて頭をもたげて来るであろう。或いは得体の知れない人種だといふところの人間観も働いてであろう。<sup>(7)</sup> その意味では西欧諸国民、殊にラテン民族との交渉と取引には将来幾多の苦難な道と、強い忍耐と努力が必要であると思われる。

以上述べて来たことから我々日本人はもともとと容易に

活躍の出来るアジア・アフリカ諸国（特に東洋諸国）に目を転すべきである。西欧との文化の交流や貿易は勿論大切であり、絶対に目をはずすべきでないが、日本人はもともと東洋に目を向けて、アジアの諸国民と手をつなぎ、民族将来の活路を見出すべきが至当であると痛感された次第である。

(1) じゅうたん織——やせた農地はあるが収穫に乏しくサルデーニャの女たちは家の中で昔ながらの織物に精を出して家計を助けている。

(2) ヨーロッパでは七月八月と休暇の月で、各自思い思いに旅行に出かけて休暇をとり、生活を一家総出で楽しむ慣習である。

(3) 「日本人はオカシナ人種」 G・G・ボンピリオさんの言いつ分（昭和四十年六月三日付京都新聞夕刊所載）。G・G・ボンピリオさんはイタリア生まれ、二八才、世界エスベラント協会常任大会書記。昭和三十九年末来日、四十年七月三十一日から東京で暮をあげる「第五回世界エスベラント大会」の準備のため東京に滞在中雑誌「おおもと」のエスベラント国際版に執筆したものである。インテリーの国際的なイタリアの一青年の彼は日本に来て、日本の生活に驚き、ついに「日本人はオカシナ人種」ときめつけたのである。曰く、

○おフロに入る序列……おとうさんの帰宅は、日本の家

ミラノからスイスへの旅（足立）

庭では入浴の時間を意味します。最初にフロにはいるのはお客さんで、つぎにその家の主人がはいります。からだを洗い（フロおけの外で）そして湯舟につかるのです。お湯の温度が四十五度になっていても悲鳴も出さないうではいるとは、日本人はなんと勇敢なことでしょう。

熱いお湯にはいるという苦痛も、一番さきにはいれるという特権でじゅうぶん償います。というのは、日本では序列に従い、同じお湯にムスコ、母、娘、お手伝いさんの順に入りますから……。毎日入浴するというのは、からだを清めるといふより、リュウマチの治療のためなのです。それというのも、木と紙で造られた家を暖めるには大きな危険がともないますから。そのため冬になると、毎年なん千という家が燃えています。

○どこでも寝ている……入浴がすめば、つぎは夕食です。家族は全員床の上ですわります。日本人はハンというものを使って、デリケートな味の食物を食べます。最初に世話好きな奥さんがお酌をし、酒を飲んで「ゲツ」という変な音を出して、急でご飯を口に押しこみます。

家族中の夕食が終わらなければ寝ることはできません。というのも、ひとつのへやがなんにでも使われるからです。テーブルをかたづけ、いたずらつ子が穴をあけた押し入れの戸をあけて、ベット代わりの薄いフトンを取り出します。すきまからは風がようしやなくはいってきま

す。紙でできたショウジやフスマはプライベートシーを許しまん。父と母の内緒話は、家の端にいる好奇心の強いお手伝いさんの耳にまで届きます。赤ん坊でも泣こうものならさえぎるものはないありません。そんな中で眠るのは容易なことではありません。ですから日本人はあらゆる機会を利用して寝ています。事務所でも、地下鉄でも、電車の中でも。そんな時、彼らを起こすと、きまつて「自分は眠っているのではない考えごとをしているだけだ」といいはります。ほんとうに、日本人であるということはむずかしいことです。……日本人であるということとはむずかしい。それには複雑さといわず、自分自身に対して残忍な行為をあえてするという勇気が必要です。道路を歩くのも、友だちに会うのも、食事をするのも、この日本においては世界中のどこの国よりもむずかしいのです。日本人はそのようなことに慣れきっているのだ、といってみてもしよらないことです。

スパルタ人でさえも恐れるようなきびしい教育のために、日本の子どもは西洋の同じ年ごろの子どもより、社会に適應するのに二倍も努力しなければなりません。何万という小さな道路で区切られている土地には何十万という木造の小さな平屋建てが並んでいます。しかし、その家には番号もついていませんし、道路には名前もありません。だれかをたずねようとしますとまるで、行き先

がわからないかのように同じような家の間をグルグルまわらなければなりません。

戸口をつぎつぎとたたき、小売り屋さんに聞き、おまわりさんにたずね（しかしなにより肝要なのは、忍耐強くすること、運にめぐまれることです）、やっと相手の家をさがし出します。なんとという骨折りでしよう。それにもかかわらず、日本人は道路に名をつけるのを拒むのです。——伝統という名のもとに。ですから日本で最も大切にされ、尊敬されているのは、子どもと老人を除いては郵便屋さんです。

○横断は黄色いハタに守られて……信号のある所では比較的かんたんです。ただ、信号が変わる時、道路の真ん中にいないように注意することです。ですから両側からかけ出して渡るのです。信号の無い所では、まったく別の種類の安全器があります。渡る前に、横断者は、字の書いてある黄色の旗を箱から取り出し、旗を前に掲げて、たぶん「注意」横断中」と書いてある字に守られて渡るといふわけです。

○クツヒモとの格闘……外でおこるめんどろを避ける場所は、日本人にとっては、家庭だけです。だけど西洋人が「親密な家庭の静穏」と呼ぶものを見つるのは困難なことです。家に入ると靴を脱ぎますが、もはや日本人は脱ぐのに便利なゲタははいていませんから、まずクツ



ヒモと格闘することになります。

それがすむと、奥さんがキモノと新聞とお茶をいっしょに持って来ます。日本人は毎日三千六百万部もの新聞を消費しています。しかし、初めから終わりまで読む人はマレです。ふつうの教育程度の人にはけっして習得できないような字が多いからです。それは半分は日本人自身の五千字の漢字から成り立っています。ラテン文字を採用するという提案は「やさしすぎる」という理由でかたづけられました。

これがG・G・ボンピリオさんの日本人を「オカシナ人種」ときめつけた言い分である。

(4) イタリアの大学入学試験は非常にむづかしい。卒業する事も同様、ボッコニー(?) 経済大学の如きは入学者のうち一八〇位しか卒業出来ず、本当に学問の好きな能力のある者だけが最後まで大学に残って卒業する。他の多くの者は途中で退学し就職する。

(イタリア人で高等学校卒業の一女性の話)

(5) ロンドン大学のシートンワトソン教授(ロシア史担当)は、今年の一月六日出版された「現代史ジャーナル」創刊号で、欧州や米国の大都市の「無秩序な群衆」の中から新しいヒトラーやスターリンのような「怪物」が出現する可能性がある、と述べている。

同教授はまた、新しいアフリカの独裁政治は、ソ連や

ミラノからスイスへの旅(足立)

中国よりもヒトラーの「第三共和国」に似たものをつくり上げるかもしれないといひ、「新しい世代の人々に、昔の危険のことを警告するためにファシズムの研究をもっと進める必要がある」と主張している。

(朝日新聞、昭和四十一年一月八日付朝刊所載)

(6) イタリア人の教養の深さは日本人を含めて東南アジアの諸国民との比較において問題にならない。特に文科系に属する教養においてしかりである。これ等の多くは高等学校時代に涵養されており、日本の高校生や大学生が試験と単位の履習獲得に汲汲としている点とは雲泥の差が見られる。

(現地日本人の話)

(7) 西欧諸国の対日差別

(昭和四十一年一月八日付、朝日新聞所載)

外務省は十三日から十五日までローマで開く、在欧公館長会議で、これまでの対西欧経済外交政策を再検討し、技術、資本提携をも含めた広い経済交流を推進する方針である。(中略) 同省としては差当って、①ガットや経済協力開発機構(OECD) など国際的な経済機構を通じて対日差別の撤廃を訴える、②政府間の貿易交渉だけでなく、民間経済人の交流、資本技術提携等貿易の基盤となる広い範囲の経済交流を広めるなど考えている。(中略) 同省がこのような新しい政策を考えている背景としては、次のような事情があげられる。

一、西欧諸国の対日差別品目は、現在、イタリアの九十七をはじめ、ノールウェー七十七、フランス六十八、スウェーデン四十七、ベネルルクス三十三などとなっている。（以下略）

#### 四 スイスの旅

「ヨーロッパ」の屋根と呼ばれる白雪をいただいたアルプスの山々、静かな緑色の水をたたえた美しい湖、雄大で永遠な神秘をひめた大氷河、轟々と爆音をとどろかせてジェット機はアルプス連峰の真上を飛ぶ。多彩で美しい牧歌的風光明媚なスイスの国チューリヒ Zurich へ向っているのだ。

しかし、この美しい、世界の観光国として名声を馳せ、永世中立国として、今日の平和と繁栄を築き上げるまでには、苦難に満ちた長い歴史があり、スイス国民の限りない努力が結晶となってあらわれているのである。

スイスは、我が九州七県の合計よりも小さくて、その三分二が山岳地帯であり、その山岳地帯からは金銀はおろか、石炭のかけらも出ない、国土の六割を占めるアルプス山脈が北東から南西に横たわり、北西部にはジュラ山脈 The Jura が走り、その間にスイス高原が広がっている。一般に山は高く、

四時雪をいただき、氷河が深く、谷が多く、清らかな湖水、古い城、古い寺院を中心に小じんまりとした町々——山あり、歴史あり、文化あり、実に、国全体が一大観光地である。国民は親切であり、手入れの行き届いた清潔な街や公園、学校や博物館、実に世界の公園にふさわしい国である。

一九一九年の建国、世界でもっとも古い共和国というのが自慢であり、二二州の連邦からなっている。各州 Canton は日本の府県のような行政区画ではなく、憲法、政府、議会をもっている。しかも、四つの外国にかこまれた山間の小国（人口五四〇万）のため、風俗・言語など、まわりの国から強い影響をうけ、人口の七四％がドイツ語（北のバーゼル）二一％がフランス語（ジュネーブの西）を四％がイタリア語（南のルガー近辺）を母国語とする。宗教は五六％がプロテスタント、四一％がカトリック教、その他がユダヤ教というように国民の構成としては実に複雑であるが、しかし全体がスイス人として団結している。しかも、現在、世界の永世中立国として認められながら、国民皆兵によって相当の軍備をもっている。日曜日の Zurich の町には、日曜日の外出を家族連れ、恋人連れ、或いはグループ連れで楽しそうに歩いてい

る兵隊によく出会った。Geneva では勇壯な軍隊の一団が、街頭を吹奏しながら行進するのに出会って驚いた。スイス人は自国の独立と平和のためには、外国から侵略されないだけの武力と自衛力を持ち、その体制の維持に懸命の努力を払っているのである。祖国不在の日本、戦後の日本にとって、よき参考資料となり得る国であろう。スイスではそのために、国民一人一人が二十才から四八才をすぎても六〇才までは応召義務がある。しかも三五万の市民兵を一日で召集出来、非常時に備えており、国民兵総数六〇万人口（一二％）が三日間で動員される仕組みになっているといわれる。しかも、演習を経た兵卒はその装具と銃を自宅に持ち帰って保管することになっている。

「ローマとスパルタとは数世紀にもわたって民軍によってその自由を維持した。今日のスイス人の自由なのは一に彼等にもまたよい軍備があるからである」とマキャベリが一六世紀初めにいった言葉が今日も生かされているのがスイスである。

(一) チューリヒ Zürich (九月二十日到着)

チューリヒは、ラインの支流、リマト川をふところに抱いて

ミラノからスイスへの旅 (足立)

Zürich 湖の北西湖畔にあり、スイス最大の都会で、人口三九万、新石器時代（有史以前）には湖上に住民が住んでいて、その杭上住居跡が残っている。紀元前一〇〇〇年頃にトゥルクム Twricum と呼ばれた町が、Linden Hof の丘にあったのが、今日の Zürich の町の起源とされている。一三五一年、スイス連邦に加盟し、一六世紀には、ジュネーブと共に宗教改革の洗礼をうけ、新教徒の都市としてヨーロッパ文化の一つの中心地となり、今日では世界で最も美しい都市、国際観光都市として、又、この国の商工業・教育・文化の中心として繁榮している。

Zürich See から北に流れる Limmat をはさんで整然とした美しい市街が、実に小じんまりと出来上っている。アテナやローマ等に見るどっしりとした建物ではなく、近代的な明るい女性的感じのする町並みである。

町角にもリマト川畔にも、はたまた、何階建もある洋館の窓という窓には、赤・黄・紫色と、色とりどりの花が競い合っていて旅人の目を楽しませてくれる。実に花で飾られた美しい平和な町である。リマト川には白鳥が浮び、真鴨が游泳し、老婦人たちが盛んに餌を与えている愛情に満ちた風情は、見

ていても実に美しくほほえましい光景である。鳩も雀も人に馴れ、掌上の餌さを啄んでいるし、誠に愛鳥精神の徹底した国であるのに感心させられた。

Bahnhofstrasse（駅前通り）には近代的なビルやデパートが立ちならび、街頭には、スイスの国旗と赤十字の旗が飾られ、平和を象徴し、とても美しい。駅に出ると、ゴットアルト鉄道の創始者 Escher の銅像が駅前の広場に立ち、美しい赤いゼラニウムの花で飾られて国民の敬愛をうけている。駅舎の数多い、窓という窓は花で飾られ、国旗を立ててスイス国民の意識と愛国精神を強調している。

(I) スイス国立博物館 Schweizerische Landes museum  
国立博物館は此の駅の北隣にある。建物は十九世紀に建られ、中世紀風のもので、スイス最大の最も重要な博物館である。館内にはスイス先史時代の遺物から絵画・彫刻・陶器・武器・甲冑類が陳列され、外部は緑の木立、ばらの花園や花壇に囲まれ、美しい庭園になって、都市の子供達が花を囲んで楽しんでゐる。

(II) ベスタロッツの像 Pestalozzi  
Bahnhofstrasse の右手の広場 Linth-Escher Platz にあ

る。黒ずんだ松を背景に美しい緑の芝生の中に小さいが、十九世紀最大の教育家の像が、児童を抱いて立ち、とても印象的であり、思わず敬虔な気持ちに襲われた。

彼の独特の見解たる当時の教育説、すなわち、外部からの注入を排し、教育は児童の能力を内部から発展せしめる作用とし、自発性の原理を説き、直観の原理を基礎として全教育を建設せんとした彼の教育学説が、思い出されて来る。其の他、調和的發展の原理、社会生活、特に家庭生活を重視し社会の原理を論じた彼でもある。スイスの教育制度は実に彼、Pestalozzi の教育革命に負う所が多い。彼こそ初等教育の父であり、今その立像の前に立つて彼の慈愛深い温顔を仰げば、観察、愛情、信仰を三つの根本原則とし、家庭をあらゆる教育の典型とし、家庭生活の重視を今も強調している彼の叫びが、耳朶の奥底から聞えてくるようで立ち去ることが出来ず徘徊すること数度に及ぶ。「我、教育者を志してここに三十年、スイスに來り、親しくベスタロッツの像に接す、我が満足これに過ぐるものなし」

(四) チューリヒ大学、及び国立理工科大学訪問  
九月二日、紺碧の青空も、次第にアルプス山脈から雲が

湧き出て来る。気温も十度以下、始めて外套を着込む、時雨が黄葉をたたいて通りすぎる。チューリヒ大学 *Universität* とノーベル賞の受賞者を一〇人も出したという国立理工科大学 *Eidgenössische Technische Hochschule*。に行く、学舎は中々瀟洒な建物で、とても大きな大樹があり、静閑な丘の上にある。Universität の方では、学会が開かれており、東洋史の研究室まで行く、廊下が広く、日本の二倍以上はあろうか。広くとつてあるのに驚いた。学生の外套掛が廊下にならんでいる。階段や廊下等の建築様式は、以学館と似たところがある。日本文化の紹介としては、鎧、甲冑、仏壇、灯籠等が陳列してあり、近代日本を理解するには程遠いものばかりが蒐集されていたのは残念であった。まだまだ日本の研究とか、日本を認識する度合いはうすく浅いものである。

*Limmat* 川畔の *Limmat-Quai* の時計店、宝石店は如何にもスイスらしく、いわゆるスイス製の精巧さと、アイデアの販売で外貨の獲得に二役も二役もかっている。*Limmat* 川に沿って *Zürich* = *Uto-Quai* まで歩く、*Zürich-See* の沖合には無敵の、ヨットの白帆が、紺青の水と映り合つてとても美しく、湖岸には魚釣に興ずる人の群、子供連れの若夫婦、

ミラノからスイスへの旅(足立)

殊に年老いた老夫婦が互にいたわり合つて散策したり、ベンチによりかかつて日光浴をして逝く秋を惜しみ、寒い冬を迎えようとしている光景は、とくに日本で見られない愛情に満ちた美しい光景である。たしかに西欧は夫婦本位の国であるといつづくと思う。

#### (四) ジェネバ *Geneva* (人口一七万)

ジェネバはスイスの西南端フランスに近く、三日月形のレマン湖畔にあり、*Lac Lemman* の美しい水が、ロース川 *Rhône* になつて流れ出るところにあり、ヨーロッパの最高峰モンブランの白雪皚々たる麗姿が湖水のあなたに見えて、実に風光明媚な都市である。

有史以前に杭上集落がこの附近で知られ、湖上生活以後はレマン湖およびロース川左岸の丘上に民家が集つた。そして独立の精神に富むヘルヴェチヤ人は中世には既に共和国を建設していた。<sup>(1)</sup>

#### (五) モンブラン通り *Rue du Mont-Bland*

コンナヴァン駅前 *Gare Cornavin* から湖畔に通ずる大通りであり、市で最も繁華、両側には豪華な土産物を売る店舗がつづいている。モンブラン橋に出ると青い湖面、世界一

高いといわれる大噴水の飛沫が太陽の光で七色の虹をつくって見事である。橋の中央の右側にルソー島 *Île Rousseau* があり、島上にはボブラ、菩提樹にかこまれて、この町の時計屋の息子に生まれ、世界的哲学者となったジャン・ジャック・ルソーのブロンズの像（一八八三年）が立てられてある。橋を渡り切ると、橋の左側のたもとに、イギリス公園 *Jardin Anglais* があり、花時計が時を刻んでいる。いろいろどりの花壇と芝生が、大噴水まで続いている。モンブラン橋を渡ったすぐ左側湖畔の花園の中には立派な国家記念碑が立ち、スイス国民の団結を象徴している。坂道を上って行くと宗教改革家ジョン・カルヴィンの素朴な説教壇のある壮麗なサンピエール大寺院に出る。中世に生れたような古い町並みもあり、モンブラン通りの近代さとは対照的で興味がある。カルヴィンの偉大に思わず頭の下る思いで一ばいになる。

(4) 芸術と歴史の博物館 *Musée d' Art et d'Histoire*

彫刻で飾られた立派で大きな、ルイ十六世紀時代風の建物である。ジェネバの古代村落（有史以前）からの発展の歴史が模型で作られ、よく整理され、遺物が蒐集され、この国の教育水準の高さが思い知らされる。さすがに時計の国だけあつ

て、十五世紀以来の時計のコレクション（砂時計・灯火時計等）には感心させられる。

(5) ジュネーヴ大学

緑と黄葉のこぎませた木立、緑の芝生、色とりどりの花園に囲まれた静かな公園の中にある。宗教改革記念碑 *Monument de La Reformation* のカルヴィンを始めとする功績者の彫刻が、学舎と向い合って建っており、実に環境がよくて羨しく思う。「一五五九年カルヴィンの提唱および指導のもとに、ジュネーヴ・アカデミーがその起源。したがって、始めは主として神学が専攻されたが次第に他の分科が設けられ一八七三年に現名の大学となった。現在は文・理・法・経済および社会科学・医学・神学の学部があり、図書館・博物館・植物園・天文観測所・教育研究所が附属している。」<sup>(6)</sup> 美しい樹木と花と緑の芝生の中に暖かいゼネバ市民の眼で見守まれた幸福な大学である。こんな環境でこそ、落ちついて、学問研究に没頭出来るとつくづく日本の大学と比較されうらやましくなる。

(1) 「外国旅行案内」日本交通公社 一八四頁

この、平和と自由の環境には、多くの迫害をうけた先

覚者達が逃避しその一人のカルヴェンがここに来て以来、市は宗教改革の時代を通じてその中心地となった。一五五九年彼が建てたアカデミーは、一八七三年大学となり、文化の中心地となっている。一八一四年ナポレオンが敗退し、スイス二州の連合政府が生まれ、永世中立が承認され、一八六四年には国際赤十字社の本部がおかれ、一九二〇〜一九四六年には国際連盟本部もおかれて、国際的な活動の中心都市となった。

(2) 高さ一二〇メートルに及び実に壯観である。

(3) 前掲「旅行案内」一八六頁

国家記念碑 Monument National——フランスを脱したジュネーブ州のスイス連邦への統合（一八一四年）を記念して一八六九年に立てられた。

(4) 先史時代、青銅時代、鉄器時代とゼネバの杭上生活から、エジプト文化、ギリシャ文化、ローマ文化の遺産の数多い貴重な品、キリスト教関係の芸術、武器コレクション、ジュネーブ派の絵画、衣装、工芸品、十九世紀初期の生活様式、キリスト文化等、実によく整理されており、この博物館だけで世界文化史が手に取るように目で見ることが出来る。入場料は無料で児童が盛んに見学し、目で、身体でスイスの歴史を学んでいる。

(5) 一九〇九年カルヴェンの四〇〇年祭を記念して立てられた。

ミラノからスイスへの旅（足立）

(6) 日本交通公社発行 前掲書 一八七頁

## 五 スイスの工業

スイスは国土の八割を占める世界の屋根、アルプス山脈が北東から南西に横たわり、北西部にはジュラ山脈 The Jura が走り、その間にスイス高原が広がった実に貧しい国土ではあるが、この国土の貧しさを克服し、一人あたりの平均所得がアメリカ、スエーデンについて世界で第三位という豊かな国をつくりあげているのは、一つには前述の如き観光事業収入であり、他の一つは、スイスの勤勉な国民性を活かし、<sup>(1)</sup> 山の恩恵に与かる豊富な水力発電を活かして発達したスイスの工業のお蔭である。スイスは一九世紀の産業革命以来、高度に工業化され、今では石炭、鉄、銅など少量の原材料を輸入し、一般機械工業をはじめ、時計、歯車などの精密工業や車輛、電機機械、光学機械、各種医薬品、染料、プラスチック等の化学製品を生産し、いわゆるスイス製の高級品に加工して輸出する世界有数の高度加工貿易国として繁栄しているのである。そしてなお、量より質を、といった高度の技術の優秀性の保持に鋭々として努力している姿は、東洋の工業国を任じ将来、加工貿易国として、その活きる道を

立てんとするわれわれ日本人として、大いに参考とすべきことではあるまいか。今、スイス工業製品の輸出状況を簡単に示すと、凡そ次の如くである。

「スイス製」と誇り高き伝統と優秀性をもつ時計工業が全輸出の五分の一、巨大な電気機械とか、ディゼル・エンジン・工作機械・精密機械の輸出が三分の一、その他、化学製品が六分の一、織物（精製品、刺繡・編物等）、食料品（乳製品、チョコレート）、其の他が五分の一である。国民の四割が工業に従事し、国内生産の三分の一が輸出されている。あらゆる工業製品は国内向けというより、輸出向けであるのが、この国の一大特徴であるともいえる。

(1) スイス人は勤勉である。

「朝、Sさんはチューリヒ郊外にあるアパートから市内のオフィスに車で出勤する。Sさんは航空会社や商社の仕事をもつ少壮弁護士である。

Sさんを送り出した夫人は、早速、部屋の掃除、洗濯、その間には上のお嬢ちゃんを幼稚園に送り出す。末っ子の坊やの世話もする。そのうち、昼が近づく。近くのマーケットに食料の買い出し、一、二時半から二時間もある昼休みに、Sさんが食事をとり帰って来るから

だ。

一家がそろっての昼食を終り、Sさんがまたオフィスに出かけると、子供たちの相手をしながら裁縫。そして夕食の準備、夫人の日課はなかなか大変だが、結構テキパキと片づけて行く。この典型的なホワイトカラーのSさんの家庭でもわかるように、一般のスイスの家庭生活には、ぜいたくさや無駄な感じは全くない。無駄をはぶいた規律ある日常生活を重んずる合理主義精神が徹底しているのだろう。」（世界文化シリーズ8 三五頁より）

(2) スイス人は時計を買わない。

苦難にみちた長い歴史を、たゆまず乗り越えて来たスイス人は勤勉であり、節約家でもある。チョコレートの本場であるスイス人が、これすらなかなか口にしたくない。まして時計をいちばん買わないのもスイス人だ。スイスの時計の生産量は、年間四五〇〇万個。これは世界の時計生産量の半数近いが、そのうちの九五パーセントを輸出している。残った五パーセントのうち四パーセント以上は旅行者が買って帰り、スイス人が買うのは一パーセントもない。論より証拠、スイス人のもっている時計はどれも古ぼけている。理由を聞くと「機械が優秀でこれはないからだ」という。そのとおりかも知れないが、そうではない面もある。

節約の精神。これがスイスでは美德である。



(参考) 世界文化シリーズ 8 (四四頁)

## 六 スイス人の日本人観

一、世界の公園といわれるスイスは、外国人に極めて親切である。この国には Swiss Hospitality という言葉があり、国をあげて旅行者を歓待する国風は、まことは羨しい限りだ。例えば、道に迷って、道行く人に尋ねても実に親切丁寧に教えて呉れる。しかも、間違った方向に行かぬよう暫く見守ってくれ、若し間違いでも犯したら大声で後から呼び止め、わざわざ坂道を上って来て、正しい方向へ導いて呉れる。こんなところに、スイスが国をあげて旅行案内者のようであり、実に気持ちが良い。私には、親切だったスイスの老婦人、親切であったスイスの食堂の老亭主等の親身にちかいかい不案内な旅行者への取扱いが身にしみて嬉しい。(今、思い出してもかくありたいと思われる。)

二、スイスは国土が美しいゆえに貧しい。九州よりやや小さい広さだ。これでは五四〇万の人口の半分も養えない。食糧は輸入が頼みの綱である。このために、スイスの貿易収支は、毎年赤字である。「一九六〇年の国勢調査でも、一五億四〇〇〇フランの赤字である。この赤字を埋めるのが、観光

事業に代表される貿易外収支なのである。同じ年のスイスの国際収支は、驚くなかれ、四億フランを越える黒字にさえなっている。」<sup>(一)</sup> 実にスイスは観光事業で食っているといえよう。しかし、我々はスイスの勤勉な国民性や、愛国心を忘れてはならない。スイスは現在外国資本の侵入を恐れ、その防衛に懸命であり、躍起になっている。

例えば二五人以上スイス駐在の既得権をもつ商社、その他の出張所を二五人以下の駐在員に引き下げており、新しく、スイスで就職せんとするものには、必要な労働手帳の下附を認めず、日本から派遣されて来る記者の如きも、三カ月以上の駐留が認められないため、三カ月以内滞在して一旦国外に出る再入国の手続をとって、再入国の許可を貰い、再び入国をして仕事をしなければならぬ。(しかも三カ月以内、これを繰返すわけである。) 非常にスイスに滞在して仕事をすることは、不便であり、不利な条件下におかれているわけである。観光は大いに、それこそ国を挙げて歓迎する(外貨獲得のため)が、スイスに入国して働いたり、労働したりすることは拒否している現状である。

三、なお、先年、スイスで開催した日本見本市の如きも、

日本技術の精巧さ、優秀さ、廉価性、殊にトランジスタ、ラジオ、カメラ、テレビ、時計類の如きは、かえって、日本の精密機械工業の進歩に対して、スイス人をして、驚きと警戒心と競争心を培った結果になったとも見られる。国際的には親善を高め、日本文化を紹介し、その優秀性を認めて貰うよい機会ではあったが、その反面、「日本の精密機械工業恐るべし」といった恐怖心をそそった点も確で、日本見本市の功罪を天坪にかけた場合、相半ばするとは、現地日本人の声である。

(一) 世界文化シリーズ 8 「スイス・オーストリア」 四四頁

なおスイスには全国で約八〇〇〇のホテルその他の宿泊施設がある。又、海外投資による収入も相当あり、これ等が貿易外収支である。